

シベリア回想録 その後

## 「桜堂泰の中国残留孤児救出活動」

この一文は 2008 年 02 月 03 日から 26 日にかけて「草と闘う」ブログに掲載されました。

## 桜堂泰氏の娘・野口三保子さんの「父への思い」

今日、平成19年12月5日、私はNHKテレビ「そのとき歴史は動いた」を偶然見ました。戦後の引揚者のことを扱っていました。終戦後の海外引揚者は660万、そのうち中国（旧満州）、ソ連から約220万人であり、全体の3分の1です。ここでは主に満州とソ連への捕虜となった引揚者を取り扱っていました。

それによると敗戦後の国の無策で放置されたままの人を救うべく、中国残留日本の民間人の代表者4名が日本に戻った。そして日本政府に助けを乞うが受け入れてもらえず、マッカーサー元帥に直接会いに行き助けを求めた結果、やっと実現したということ。この話は当時のことを知る生存者の証言で、私はこの話を聞いて涙が流れて止まりませんでした。

折りしも今日は私の誕生日です。太平洋戦争開戦3日前に生まれた私は66歳で、開戦後66年目の今日です。今、亡き父が書き残した原稿を読んでいます。何とか纏め上げたいと思いつつ・・・。

父と母の生き方は美しかったと、今思います。単純で美意識の強い明治生まれの人間で、「恥の文化」を身に付けていたので、高齢になるほど騙されやすい人間になっていきました。父には思ってもみない最後を迎えたのですが、私達父を見守ったものとしては、父が私たちに精一杯の幸せをくれたことに感謝しています。そこでこの父の人となりを誇りに思い、後世に伝えていきたいと考える次第であります。

父は満州では満鉄に勤務していたが、現地召集となりソ連の捕虜となりました。5人の子を母に託していくときの心境は数十年経っても忘れられずに、仕事を引退したあと70歳を過ぎて一冊の本に纏めて書き残し、その本を家族、親族、友人に渡しました。また父を最後まで看取った三男充丈は父の3周忌にはこの本を再版して出席者に贈呈しました。その本の名は「桜堂泰のシベリア回想録」でした。

父はシベリアから帰国した後も、いつも満州に取り残された残留孤児を心配していました。その父がその後中国残留孤児に会いに中国を訪問しています。今回まとめたものは、中国残留孤児を訪ね歩いた記録文である。そのとき父は75歳でした。

父の法要を平成19年3月4日に行いました。また父が活動していたところでもあり、私たちが生まれたところでもある中国東北部（旧満州）に行くツアーに参加することが出来ました。父が働いた満州鉄道列車に乗り8日間の旅が出来たことは望外の幸せなことでした。

更にこの年の暮れに、父の本「桜堂泰のシベリア回想録」のネット掲載が出来、またA4の本として再登場でき私としては感慨深い年となりました。

## 中国訪問紀行 「残留者との対面の旅」

過日、福島県引揚者会連合会の主催による標記の旅行に加わり、彼地に居られる残留婦人及び孤児たちの状況把握と引き上げに関する両国の問題等の打ち合わせのため、瀧田会長を長とし 20 数名の団員で中国を訪問した。私はフリーの身だが、この組織は彼の地にゆかりをもつものである。したがって各人の胸中には種々の秘められた思いを抱き、眠れぬ夜を過ごす真剣な訪問であった。

3 月頃より計画、中国当局に申請したのであっても、行く先希望の北学田地方はチチハルの奥地ゆえ、なかなか許可にならず、勿論露国の国境へも近く悪条件が重なっていた。北京、ハルピン方面は観光旅行も可能で許可される現状である。推測するに、残留者との対面に何か不安なのか、或は地方の開発関係を見られるのがいやなのか、それゆえ許可が出なかったとすれば、今回許可された理由は何なのか。私は実は諦めていた。しかし団長の根強い交渉の結果とその努力の賜物と思う。旅行が出来たことはうれしいことであった。

### 成田で見た涙 1

騒々しい空港の出発準備に全員ロビーで右往左往する人々を眺めていた。何れの空港も同じ状況であろう。所用のためか、出国者のなんと多いことか。外国の人々は少ないのである。旅客機は窓下に大きな翼を拡げている。作業中の人々と比較してみる。象の下の猫のごとくである。文明科学の進歩は今後如何になるものであろうか。間もなく一日にして世界一周する旅客機が出現するのではあるまいか。未来の大空を想像しながら若き中国に想いをはせていた。

会長は我々より 7, 8 メートル離れ、若い婦人と語り合っていた。そのうち婦人は、ハンカチで盛んに涙を拭いていた。悲しい涙なのかうれしい涙なのか遠くて分からない。後ほど会長にあの婦人は？そしてまたあの涙は何だったのか尋ねてみた。

会長曰く。

「日中国交回復以前のことである。当時 18 歳くらいの彼女が帰国した。父病気とか、特別許可を得て帰国してみると父に異常はなかった。中国には夫や子供もいる。子供を想う余り帰国しようとしたが許可はない。思い余って会長のところに相談に来たという。しかし国交のない当時の状況からは手段がない。結果として国交回復まで滞在して、その後の手段を考えるようにと話し合った。その結果生活の方法として土地の小学校の用務員に世話して上げた。

これが彼女の話の大略である。しかし若い身空で一人で内地の生活は何ほどか苦労だったろう。そのうち彼女は用務員を辞めて上京した。どんな仕事を得

たのか知らないが、県人と結婚して安泰な生活を送っているという。うれしい話であるが彼女は何のために空港に来たのか。連合会が中国に行くことを知ってきたのかもしれない。とすれば、昔世話になった会長の顔を覚えていたのだろうか。否全然分からなかったらしい。言われて初めて驚きとお礼の言葉やら、それ以後の話となり、やはり涙、涙が先立ってハンカチーフで拭き拭きの話であった。一人残してきた子供の安否を会長に依頼したようだ。最後は流れる涙で目を真っ赤にしていた。彼女の子供はまた孤児として名乗りを上げるだろう。そのときの縁者はどのような対応をしたらいいのか。

## 成田で見た涙2

中国の孤児は今、40歳の壮年期にあり、中国の一員として奮闘しているのだ。帰国の父母兄弟は殆んどは苦難の中を切り開き現況にいたった人々である。苦難に勝った人々の中の父と称する者は、これまた殆どソ連の捕虜となり、思いもよらぬ苦難を味わう。わずかに生命を永らえて帰国したものであるがゆえに、満州に残した妻子は如何にしたものか、その消息は不明であったのだ。帰れない婦人や子供たちはそのまま残留婦人となり孤児となったのである。

残留婦人は現在60歳前後の年齢となり、日本語は明瞭であるが孤児はベトナム人と同様日本語は殆ど分からないのである。唯、生みの父母に一目でもいいから会いたいと願う気持ちはもつともなことである。これに対し縁者は万難を排して面接慰問すべきは論を待たないであろう。ただ、その後の生活について残留婦人ならいざ知らず、40歳前後の孤児には第一に日本語を早急に勉強し、社会環境に溶け込ませ、生活のための腕をみがくなど急がねばならぬ事項が沢山ある。この苦難に耐えられるかが最大の急務である。もし、この苦難に耐えられないとすれば帰国を断念して、日中の架け橋になっていただければと思う。そして孤児と父母兄弟で日中を訪問し合うことが最良と思われる。万一にしてこれも不能であれば中国物資の低廉な価格と比較し、日本円にして月に1万円程度を送金して彼らの給料と合わせれば相当余裕のある生活が出来ると思う。

彼の地で4、5人の家族ならば1ヶ月6千円程度であるという。また、チチハル方面と北京では倍額の違いがあるという。いずれにしても送金すれば中国での生活は安泰になることと思う。勿論種々の苦難がある。これは両国とも同様でことを考えねばならない。

また残留婦人たちの悩みも考え対応する手段はやはり老境にあるがゆえに、帰国を断念する者に国家の補償をこれに当てるのが最良ではあるまいか。帰国希望は全員の意味としても、彼の地に夫あり、また2、3人の子供がいる。生活環境が違う中で帰るということは、これまた苦難のことと思われる。今回の

中国訪問で種々話を聞き、また現実に皆さんとお会いして、私が広野を走る車中で思いを巡らせた結論であったことを参考までに理解していただければ幸いです。

## 北京空港と孤児

空港の大きさなどを成田と比較しようにも、果たして成田の全景と北京の前景等は目に入らない。何れも大きなものであるの一言につきる。30 数年ぶりに中国人に会える期待が大きかったことは事実である。空港で働く中国人を見て服装こそ違いますが態度や目付きは昔とは雲泥の差があると思った。

衣服さえ同じならば、日本人と見間違ふほどである。朝鮮系よりは日本人に近く感じられる。税関を通り人混みの中を出口に向かわんとおる時、突然前面に3人の若者が現れ、「私は孤児であり日本に帰りたい」と申し出られた。私も初めてのことであり面食らった。彼らはいずれも「親を探してほしい。そして日本に帰りたい」と言う。男一人、女2人であり、男女2人は兄妹で、一人の女性は厚生省発行の顔新聞を持参している。

王桂栄・40歳くらい、両親は北海道出身らしいが、手紙を出しても返事が無い。王和林・日本名松本政明で兄。王趙魏・日本名松本文子で妹。この孤児たちはわが日本人を見ると誰彼なく父母探しを依頼している人達であろう。私に依頼されても短時間のことであり、即答はできない。それで「今度、多数の方々が親探しに日本に来るはずであるから、そのときに一時帰国するように」と言ってわかれたが、日本政府の積極的な対策を願って止まなかった。

ただ、親たちよ、一目でも会ってやってほしい。薄情な親とならぬようにと願って止まない。国家間の交渉がまとまれば、帰国希望の孤児たちは続々と帰ってきて定住することになれば、全力投球の親探しとなるだろう。こが親探しをしている以上に、親の方は子探しをしなければ、と胸中複雑な思いで私は機上の人となりハルピンに向かう。

## ハルピンに向かう機中にて

機中隣の席の中国人と何となく話をしてみたくなり声を掛けた。彼は上等な服地の詰襟を着こなしていた。

問 何処まで行くのですか

彼 チチハルまで行くのである

問 私は37,8年前の中国を知っている。今の中国の人々は大変積極的な動作でものを処理しているようだ。空港で見てきた。日本も見習わなければ

ならない。

彼 否々。中国は日本を参考にして教育に全力を注いでいる結果である。

問 北京市内を一寸見たが、建設といい建物といい大変な発達である。あと15年くらいで日本に追いつくであろう。

彼 否々、この調子で進んでも25年かかる。30年位して日本に必ず追いつくことが出来る。

彼・中国人は、どの級の公務員なのか。私のブローケンな中国語に手まね足まね、又お菓子袋に書いた筆談で、このように答えてくれた。この言葉は帰国した後も私の頭から離れない。ハルピン以西旅行にみる開発の状況から見て、またその資源から推測して、万一彼らに追いつかれたときの考えるならば、即属国となる立場におかれることになるだろう。考えるたびに冷血が体内を走り回る。考究、研究、努力、平和、老いた頭が空回りする。

飛行機の旅は唯々早いのみで、汽車のように周囲を眺めながら楽しむゆとりがない。時間的に雲泥の差があるが、訪中の目的から早く目的地を訪問しなければならない。ゼスチャー混じりの会話の中、ハルビンに到着した。

## ハルピンに着く

又思う空港の大きさ、大きいのみで我ら旅行者には比較など到底出来ない。大急ぎで建物外に出る。すでにバスが待っている。きれいなバスである。宿泊ホテルに向かう。窓外を眺めるに余りの変化に驚くのみ。よくやった。道路及び建築物の改良改善、道路巾は50メートルより80メートル、所により100メートルはあると思う。しかも舗装道路である。建物も同様道路の両側に4階より7階程度まで連続建築中である。飛行機では途中の奉天や長春の復旧状況を見ることは出来なかったが、この遠いハルピンさえこの様子、今後行くチチハルはいかがだろう。またその奥地北学田及びノーホの町は如何だろうか、私の期待は膨らむ。

ホテルへの途中は、彼の地の一日の終了の時間帯である。通行の自転車が上下左右とも一様であり、その間をトロリーバスや貨物自動車通過する。バスや貨物自動車の前を自転車がチョコチョコと通る。しかし事故は起こさない。日本ならばおそらく「バカヤロー」と大声が飛ぶに違いない。バスがホテルに到着する。聞くとところハルピンの人口は300万、自転車は200万台と言う。なるほど交通状況を見てさもありなんと思う。日本の自動車がハルピンでは自転車と言うところかと思う。交通標識も交通巡査も不要、なんとも和やかな交通で、自転車とバスの速度が同じ位で、混雑の中に共存している。この交通システムには大陸の鷹揚さが現れているようである。

## 同行の森さんと姪の対面調査

さて、ホテルの客室に向う。階段を昇りきった廊下には机を備え、室内係り兼監視員がいる。時には一人、或は男女2人の若い人達である。エレベーターで昇ればこれに会わないが、遠くから客人を監視することが出来る。客室はきれいであり、いつか行った北京のホテルも同様にベットも上等である。

今夜は同行の森さんの在満孤児・実姉の娘がハルピンに居住している。その確認のため重大な対面が行われる予定である。聞くところによれば、この姪は一時帰国の一団の中で来日したけれど、親も誰も会いに来てくれないと泣きながら帰ったと言う。私が残してある新聞の顔写真の中に不明の印がある孤児であった。

対面室をのぞくと机一杯に写真を並べ、森さんはじめ通訳も真剣な表情である。森さんの対面は私には初めての場、口を挟むのは遠慮しなければならない。彼がドアを開いて出てきたとき、私は彼に「森さん、おめでとう。遂に姪さんを見つけたな。よかった、よかった」と申し上げた。ところが彼曰く「99%まで姪だと思うが、残りの1%の判定がつかない。まだダメなんだ」

私は一人廊下を歩きながら考えた。この孤児を認定する難しさ、生まれたばかりの赤ん坊に残されるものは何かあろうか。彼女の母は産後すぐに死亡した。父はシベリアの捕虜である。運命とは孤児に一塊の雲を供えてただよわせ、広い空間に放棄するものなのか。もし彼女が今回確認されなかったなら等考えながら寝床につく。やはり眠れなかった。

後ほど同室の瀧田会長に森さんのことを聞くと、やはり1%が引掛かり決定しなかった。チチハル帰りに今一度このホテルに戻るから再度面接しましょうと言うことになったとのことである

## チチハル行き

ハルピン駅も40年ぶり、伊藤博文暗殺箇所の真鍮の鋳は見当たらない。改築された立派な建物であり、当時の面影はなく列車もまたコンパートメント（小さく仕切られた客室）で、個室4人席、テーブルには茶の接待準備が出来ている。昔はこのコンパー車は余り運行されなかった。列車が出発した。そして私は40年前の渡満当時を思い出した。ハルピン鉄道局で3ヶ月程の講習を受けて、希望の方面を申請した。私の希望は人情風俗を知ると同時に、日本人が沢山入植していれば奥地でも良い。奥地から逐次南満に転勤しよう。又一方奥地の場合、満鉄は手当で等加算が大変多い。これもまた、将来を考えて気持ちを動かす点であった。そして勤務地は北満州の奥地嫩江という工務区に決定した。同

僚2人でチチハルに向け旅をした。満語が分からない二人が何を語り合ったか今は覚えていない。

ハルピン出発以来、唯大きな草原を走っている。人家が見えないのだった。40年位前はチチハルまで人家は目に入らず、駅や信号所で列車が到着すれば乗車する者、下車する者などあり、この人達の住宅は穴居生活ではあるまいかと思っただけだった。今、コンパート車から眺めると、草原はほとんど開墾されている。そしてレンガ造りの住宅が適当に回りに建ち並び、駅前周辺は沢山の建物である。この線路沿線はやはり月とスッポンの大変革である。

限りなく開墾された土地、ここに作付けされる諸々の作物等を考えて羨ましくなると同時に、日本の軍人たちはなんと馬鹿なことをしたものだ等、同室の人々と大いに語り合った。

大慶油田のことは新聞で見っていた。この油田は中支付近或は南満方面の油田と思っていた。チチハル近くにある大鉄管を、あれは通水用のパイプだろうと一人で決めていた。ところがあれが大慶油田からのパイプと聞いたときは全く驚いた。在満時には、満州には油は出ない。平地は水脈さえ十分ではないと言われていた。チチハル鉄道局の給水用井戸は鉄管パイプで300メートルも深く掘り下げていたのだ。それが40年後に石油が出るとは、ただただ驚くのみである。

## チチハル駅に着く

その昔の駅舎には両側に同じ高さの建物が増築されて昔の面影はない。駅前に出る。広場も拡大され、広い道路が一直線に両方に伸びている。道路左右の建物はどれも4階から7階の高さである。昔は道も狭く低い泥造りの家が立ち並び、ゴミゴミしていたが今は体を清めたごとく清々として近代化に向かっていった。

到着したホテルには綺麗な庭があり、建物も洋風化したものである。以前は忠霊塔の立つ大きな草原であったのだが、今は何か狐につまされたような思いだ。ホテルの裏側は植物園となり、高い築山があり少し離れて大沼がある。この沼を造るのに多くの人民を動員して人海戦術で作ったと聞いて唯々驚くのみである。しかし万里の長城を作る中国の人々には左程苦痛ではなかったのであるまいか。ここより3キロほど離れた嬾江にバスを走らせる。ゆるい流れは昔と変わらない。対岸までは1キロほどの川幅である。通う船は見えないが岸辺には大きなトレジャーが河床掘鑿である。下車した人々は昔の流れに懐かしさを覚え、水際まで足を伸ばす。波打ち際に小砂利と共に宝石メノーが色々の変形で見える。この川岸で記念のメノー拾いをする人、また堤防下でビニール袋



に土を入れている人がいた。この土を入れていた方はシベリア抑留中に3人の子供を失い、ここの堤防の下に埋葬したと言う妻の話からこの土を採集していた。この子供を埋めた場所はどこか分からないが、この土を内地の墓に収めたいとのことであった。彼の心中を思う。あの一握りの土が子供の顔に見えたのではあるまいか

## 同行の人が語る・2箇所、1,200～1,300人が

さまざまな感情を胸にホテルに向かう途中、バスが停止し同行の村上さんの説明を聞いた。

終戦時、極寒のなき中、村上さんは北学田よりこの先にある倉庫に多数の人々と逃げ込んだ。しかし食糧不足と寒さのため、次々と倒れ、村上さんの縁者も数名亡くなりここがその墓地あたりである。歩道の片側には60センチくらいの板をよろい張りにめぐらして柵とし、中に10センチの太さ程度の松の木が植えられた。その内側には東屋らしいものがある。一寸見ただけには夏の憩いの場と目に写ったが、この下には7～800人が埋葬されていると言う。

アア、何たることか。敗戦国日本の一大犠牲者である。早く国家が何れの方策でも良い、手を打ってほしい。そして祖国に帰してほしいと願わずにはいられない思いである。40年近く経ってから肉親縁者が今日墓参に来た。土中の霊も何ほどこ喜んだことだろう。

今1ヶ所計500人程度の墓地が旧小学校校庭にあると教えてくれた。しかし私は二度の連打ですっかり胸中は閉ざされた。この旅行の目的は日中友好と孤児探しのためであり、ある程度の悲惨さは覚悟していたが、かくも強烈にわが胸を錯乱させるとは、老齢の身にはこたえた。

ホテルに帰って落ち着くより方法がない。ホテルに戻り同室の幕田さんと色々感想を話し合った。窓から見ると戸外は今までになく寒そうだ。黄色の葉が街路に散っている。明日はどうだろう。それにしてもまだ9月である。私が捕虜となって外蒙古のチャイナルに送られたのは8月28日と思う。9月早々にはしぐれさえ来た。中国ではこの辺でもロシアと違い、明日寒いか否か分からないくらいである。

## 公務員のボーイが入室してきた

公務員であるボーイが部屋に入ってきた。そして「幕田さんの息子が、父が寒くて困るだろうから、これを着てください」とのことので外套の包を持参して

きた。そこで幕田さんは「息子に会いたいので、ここに来るように伝えてください」と話したところ、既に帰ったとの返事である。

不思議なことと思い幕田氏に話すと幕田氏は、すでにこの孤児の現状を知っていた。両方の関係者、つまり孤児と「日本人」から当局の「ホテル支配人」に申し出がない限り入室は禁止とか、何から何まで考えている中国当局、それ故、孤児との正常な接触、又一方では外部からの盗難防止と一石二鳥の方法である。幕田さんはその後私の質問に始めて息子・隆雄君の話をしてくれた。

彼もシベリアに行ったこと。家族は当時満州で全滅したこと。内地帰還後の生活のこと。家族全滅の悲報にあきらめと混乱の中で、30 数年を過ごしているうち死んだと言う長男の叫びが「福島民友新聞」に掲載された。

よくよく調べてみると間違いなく長男の隆雄君であった。親子の名乗りは済んでいるという。今回は養母にお礼に来たのであると。私は話を聞き「それはおめでとう存じます。何ほど養母も、また孫さんたちも喜んでくれるだろうか、おめでとう、おめでとう」。今日はなんと悲しい思いで胸が潰されそうであったのに、今夜はなんとうれしいニュースだろうと私は一人喜んだことであった。

彼の長男隆雄君は現在 42 歳、列車長の立場にある。日本に帰りたい念願でいると言う。私はこの孤児たちに個人として何の土産も持参しなかった。封筒があったので僅少の包みを隆雄君に届けていただくようにと依頼したが遠慮された。しかし無理に依頼した。

## 鶴の飼育場を見学後、幕田さんの長男宅へ向かう

昨日は泣いたが、今日は泣くこともあるまい。今日のはるか遠方の野生の鶴の飼育場の見学である。日本での飼育場は北海道の釧路にあるが、柵に囲われた湿地であり人間との接触は出来ない。

しかしこの地では放し飼いである。人間を見て喜んでいらしく飛び上がるやら、二羽で躍るやら我々のすぐ前に来て大羽を拡げて我々を歓待しているように見える。本年生まれらしい灰色の子供も見える。二羽で遠方にいったものもしばらくして戻ってくる。よく訓練したものと感心する。鶴も飼育者も大陸的応揚さを感じられる。帰り際、我々がバスに乗ろうとすると、従業員の全員が見送ってくれた。ここは見渡す限りの草原であった。ホテルに帰り、中国料理に舌鼓を打ち、満足感を味わった一日であった。

私室に戻ると同時に幕田氏曰く「今夜、私の長男（隆雄）の家を訪問するので、ご一緒願いたい」とのご招待を受けた。その招待を私はご遠慮しようと思ったが、強く薦められるお話があり同行することになった。迷惑を掛けては済まないと言う思いがあった。

日の暮れた街路はポツポツと薄暗い街灯があった。建物は新しく7階建てのアパートである。道路周辺は未整備でデコボコが多く足を取られそうである。

隆雄君は4階に住んでおり、各階の廊下には自転車が3台くらい並べてある。毎日の通勤用である。そのため通路が狭い。各階毎朝夕自転車を移動しなければならないとすれば大変な苦勞と思われたが、近隣すべて同様であればさほど苦にならないのだろうか。まだ若い中国であり、中国の教育に期待する。

## 隆雄君の縁者が一杯で大歓迎。可愛い孫娘は……………

隆雄君の部屋に案内された。室内一杯の中国の人々である。聞くところによれば、この人々は養母の縁者及び隆雄君の嫁さん父母及び縁者の由、はるか日本から来てくれた実父及び随行の我々に最大の喜びと敬意を表してくれたのであった。

隆雄君の妻の父は中国料理のベテランの由、テーブルに並べられる料理の多種多様なこと、そして多様な接待用酒、私は隆雄君の心遣いに感謝すると共に多大な負担を掛けたと思った。

幕田氏の心は晴々としたことだろうし、また養母も安心したことだろう。孫娘であると言う少女も同席していた。私の孫娘より1歳年上の18歳であると言う。幕田氏がチチハルに到着以降、いつも連れ立ち片時も離れないのである。おじいさんに初めて会ったので、何ほどこ嬉しかったことであろう。あまり可愛いので私は聞いた。

「学校はどうしているのか。何語を勉強しているのか。爺さんに会った気持ちは？等々。彼女曰く「学校は3日間休校許可を取った。現在高校3年生である。ロシア語の勉強をしている。これが私の爺さんかと思うと一時も離れたくないので、できるだけ一緒にいたい」と言う返事でした。

毎日顔を合わせている私の孫娘と比べれば、環境の相違から来る肉親の愛情は、離れることの出来ないほど強固なものとなっている。思い出の多いチチハルを明日はノーホーに向け出発である。そして限りなく愛着深い北学田の入植地に向かう。また如何なる事情が待っているやら、チチハルの夜は今夜限りである。

## 孤児の情報や満鉄時代の給水塔の思い出が

孤児は自分から申し出ても面会は許可にならない。佐藤武達さんの子供は人伝えながら、3歳くらいにして北学田の婦人に背負われてチチハルに来ていた。だが遂に中国人に引き取られて、市の西方の農家にいたことは判明している。

けれどその後の消息は、現在では地形及び組織の変化から行方をつかむことは出来なかった。幼少の身とはいえ、成長すれば我が身は中国人か日本人なのかの判断出来るはずである。当市では「孤児は3～4千人はいるはず」との在留婦人の話であるが、公安局はこういう発言を厳しく禁じている。

今日はノーホーへ出発日である。やはりコンパーメント列車の客となり、駅舎東方を眺めてみる。昔は草原の中の給水塔だったが、今は建物の中の塔である。懐かしい塔なのだ。大略レール上40メートルの高さである。私が赴任した頃竣工したものである。私たちの手で通水試験をしたが、甚だしい漏水のため水道課の幹部始め頭痛の種であった。

それは竣工早々使用不能であり、対策に困惑したものであるが、ある方法を考え実施したところ完全に漏水が停止した。思い出の塔は今も使用中らしい。建物より高く列車からも眺めることが出来た。この沿線も草原で列車から一望できた。そして農民の住宅は4キロ位遠方にしか見えなかったものだ。たぶん列車防禦のためだったと推測される。しかし現在は農家が散在している。

## ノーホー駅に着く

建築物も昔と変わらない。ピースの建物であるが道路の一部が拡大されている。思うにこの大国もはるかに遠方のここまでは開発の手を進めることは容易ではないのだ。チチハルにおける住宅街の裏通りはやはり開発が遅れているのを見て、ここも容易な業ではない。当然であろう。日本と比較して数倍の巨大面積である東北部、それでもよくやったなと感心させられることのみ多い。日本は1億、彼らは10億である。

車でホテルに着く。昔のレンガ造り平屋で、田舎の医院のような感じのホテルである。庭には塵一つなく清潔なのがうれしい。入室してみる。想像通り田舎の病院と同じである。少し詳しく話をしてみよう。北京他、2ヶ所に宿泊してみるとここは格段の田舎らしい。

先ず居室であるが、洋服ダンスとベッドは備え付けられていて、ベッドの下には大きな洗面器、その中に石鹸、タオル、歯磨きがあるが風呂場がない。ベッドは鉄製である。給湯室が別室にあり、各自洗面器を持参し洗面その他処理をすることとなる。女子の場合は各自自室に湯を持参し処理するものであろう。

トイレは戸外、7,80メートルのところにコンクリートの床に穴がある。夜間等は危険と思われるが、日本の田舎にも同様な場所はある。ノーホーのホテルは料理等は日本の田舎よりは勝っても他のシステムは見劣りするが、大変な田舎ゆえ、中国での改良もこれからかと思う。ただ料理はチチハルにも劣らぬものがあり、またシーツ、カバー類は新品であり感じが良かったことである。ま

た今まで各ホテルのボーイ、ガール達に私個人としてチップを渡したが受領してくれなかった。何処も同様である。

## 在満婦人の窮状、関東軍の棄民に怒り心頭

また、ホテルには夜は在留婦人たちが訪問されて、幹部たちは夜のふけ行くことも忘れ対応した。どの婦人たちも同じく夫あり、子供あり、生活の困難を訴えてくるが、現在ではどうしようもない。

川田書記長の在満小学校時代の同級生が、今は遠く南京におり、夫が病気の苦境でノーホーの婦人に連絡があった、胸が痛むばかりである。チチハルの一婦人からは、実母が帰国する際養母には20年くらい経ったら迎えに来るから頼むと言ったと言った。私は覚えていて早くも38年になるが迎えに来てくれない。父母が死んだのか否か、探してほしい。等々、幹部たちは我が身につまされ、涙の乾く暇もなかったことと思う。書記長の姉さんも訪問してくれた。服装を見て苦勞を感じさせられる。

この地方の日本人は軍の棄民の結果生じたものであり、関東軍の横暴さには怒り心頭に達するものである。軍の家族は転勤と称して7月15日軍用列車を仕立て、全部引揚げさせ、一般人を放棄した。その上不満なことは20年早々から7月まで、召集と称して在満男子を根こそぎ軍に徴発して家族より引き離し、ソ連の捕虜に供した。妻や子供は如何にしてこの虎口を脱出することが出来ようか、思い出すたびに身中に悪寒が流れる。残された婦人子供はすべて国家の責任において解決せねばならない等は言を待たないことだ。奥地からこの軍用パラソル列車(下の記事参照)の面影は、永久に恨みと共に私は脳裏から離れないであろう。

当初宿泊のこのホテルで夕食を終わろうとしている時、同行の佐藤さんが大声を張り上げ詩吟をされた。その前に沈みきった心をほぐすため、各自ノド自慢をすることになった。平素無口な佐藤さんのかくし芸かと思っただが、彼はチチハルで中国訪問目的のわが子の消息不明にいたく失望していた。それで心の晴れ間をこの詩吟に託したらしい。息子さんもそのうち出現するだろう、気を長く持ってほしい

## 北学田行き・小学校を訪ねる

今日は今回の旅目的の最終際終点・北学田行きである。バスに揺られながら広大な農地の真只中に出来た道路を走る。巾は60メートル位はあり、土のままであるためデコボコがあり揺れが甚だしい。農地は整備されており、すでに

刈り取りも終了しているが、畑の終点は見えない。収穫期は日本より少し早いようだ。四方山話をしているうち北学田についた。

同行の人は全員この地在住者であった。小学校の校庭に入る。下車、田舎の小学校とはいえ誠に大きい。私の故郷の小学校が12, 3室の広さであるがそれより大きく、焼瓦造りで当時としては自慢し得るものであったろう。

遠方通学者のための寄宿設備も出来ていた。ここに書記長は小学3年まで通学し、そして終戦となる。書記長は10歳の身で満人に連行されるのを嫌って自宅より逃亡したとのこと。真に思い出の深い土地であり学校であった。彼は通訳を連れて教室に入り、授業中の学生を前にして、この学校の先輩としての回想や、今後の学業の進め方など話したと同行者が私に話してくれた。

私は校庭一杯に広がるヒマワリの種子が気になった。大粒の種子が高さ30センチ位の三角山を作りきれいに並べて乾燥中である。この学園の収穫物として国家に提出するとのこと。この種子は油となり、食糧の一端を担うものと聞き、日本にこのような労働尊重の施策があったかな？と考えさせられた。帰り際に学校より、このヒマワリの種子を1人2升ほどビニール袋に入れてお土産げに贈呈され、その心根に感謝した。

## 混乱の中で死亡した方が眠る高台を訪ねる

終戦と同時に各地に入植した人及び一般日本人は不逞の輩に襲われ、各自の住宅を放棄し、極寒を避けるため、一致して倉庫に避難し、毎夜ローソクの光で生活をした。チチハル市の倉庫も多数の人々の根拠地となったことはうなづける。矢張りこの地も同様であったのだ。

学校を辞して昔の倉庫を見るに昔のまま現存していた。レンガ造りである。ここで冷夏40度の寒さと、食糧不足のため多数の人々が死に旅立ち、恨みを千載に残した。この人達の眠れる土地がこの後背の高台なのだ。私は知らなかった。高台に向かう道すがら同僚たちは何を考えて歩いたろうか。みんな口を閉ざして黙々と歩く。高台を見る。ここは一面の野原で畑はない。はるか高地には日本に神社があったという。日本から遷都されたと聞くが神社名は判らない。村上さんの父はこの神官であったと言う。我々が立っているこの地下には何百名の人々が眠っているのだ。

40年ぶりに参拝に来た肉親たちはこの現地を見て、墓前でなにを語ったのだろうか。だから道すがら口を閉ざしたのだろうか。一同墓参りを済ませ、高台より降りる。次回はいつ訪問できるか分からない。肉親は後ろ髪を惹かれる思いをしたことと思う。私も同様である。まして肉親においておや。同行の阿部

氏は草むらの中、昔の我が家の基礎を発見した。口を利かない基礎でも何ほどか懐かしかったであろう。「良くお前は残っていてくれたな」と言う。

一行の男性は殆どソ連に連行され、残された家族の避難状況は分からない人達である。人伝えに聞き、現地を見て複雑な思いであったに違いない。バスの道すがら、「誰の住宅はあそこ、誰はこちら」と耕地の中にあった昔の住宅を懐かしむ声がしきりである。

## 村上ヨシ子さんを育ててくれた養父母宅を訪問

村上さんは同行の女性の中でただ一人、この地の避難状況を知っておられる方である。昔は草原もあったろうが、今は見渡す限り開墾されている。入植時の支給土地は10町歩と聞く。今、この広野の中に10町歩を入れて考えると、全く一握りの面積である。

そんなことを考えながら村上さんが居住していた部落に着く。「あっ、家も煙突も昔のままだ」と彼女母娘の声。現在住宅が12,3軒、レンガ造りの上に粘土を上塗りしている。防寒のためか。

ここは村上さんの娘ヨシ子さんが、悲惨な生活の中で生死存亡の境にあったのを引き取り、食糧を与え見守りながら成長させていただいたその厚き温情に感謝し、お礼を申し上げたいとの訪問である。しかしその恩人は既になし。親たちから聞いていたかどうか孫夫婦という方（年齢は40歳位）に会う。命の恩人にささげる感謝の言葉を孫が受領する。感謝の言葉に孫も嬉しかったことと思う。持参の土産が渡される。

周りには沢山の人が集まり、我等の挙動を眺めているが、何れも温和な表情である。あとで聞いたことであるが、土産は集まった人全員に分けなければならぬと言うが、全員に行き渡るほどあったであろうかと心配になったことである。

## 昔の老来駅付近は馬賊出没、今は農産物の集荷場

村上さんのお礼を終えて車は一路老来駅に向かった。沿道はすべて開墾された畑であり末端が見えない。道路は広いが振動は激しい。老来駅に到着。四方を眺めるが昔の面影はない。ここは昭和14,5年頃、線路モーターカーでよく往復したところで、駅舎の外は警護隊の宿舎と開拓の訓練所のほかは住宅4~5棟、東方は湿地帯で背丈もある雑草が茂り、その東の高台にも30~40棟あったが、駅よりの距離は4キロ程度と記憶していた。

現在はどこもかしこも開墾され、一大農場である。駅より4キロ先の民家は、度々馬賊の休憩所になったことを覚えている。馬賊の出現に日本軍は少尉を先頭にして沿線の部落の調査をしている兵隊が7、8名いた。少尉に聞いてみると「基盤作戦を展開中」との説明であったが、私は納得しなかった。機動力を発揮するには当時は馬に限る。満馬は湿地帯が得意である。彼らは地理に明るい。退却に際しては日軍に終われる途中でも、農民の馬と交換して奥地に逃げる。とてもとても満馬に追いつけるものではない。当時を思い出し感無量であった。

駅舎の周辺は馬鈴薯の山である。袋に入れる者、列車に積む者、3、4頭引きの馬車で運ぶ者等々。倉庫が7、8棟見える。住宅も300棟位が一大集荷地となり発展している。この馬鈴薯は全国に配布されるものなのだろう。

産地の価格に輸送費を加算し、中間マージンなし。だから価格は低廉なのだ。日本の物価を思う。大衆魚といえばイワシ、サンマであるがこれについて考えてみる。水揚げ市場価格キロ150円が消費者に届くときは1匹50円となる。300円の時には小売1匹100円となる。こんな構造は早く止めなければ将来が思いやられる。数の子1パック1万円も語り草になるように願うものである。

## 別れを惜しむ在留婦人の悲しそうな姿が脳裏に残る

老来駅を後にして7、80キロ先の人民公社に向かう。沿線は矢張り広漠たる畑地である。この公社は機械類を展示してあり、大小様々な農業用機械が美しく並べられている。見るところ相当老朽化したものであるが、手入れが行き届いていることに感心した。ナット1ヶ、鉄板1枚すべて行き届いた管理であり、物資を大切に取り扱いしているようである。最北の訪問地もここで終了した。そして広大な畑地を眺めながら宿舎ノーホーのホテルに戻った。一日の疲れを休めようと、75歳の体にはそれなりにこたえるが、幹部たちは今夜の訪問者に泣かされることであろう。

今日は大略念願を果たし、安堵して帰る日である。朝食をとりながら戸外を眺める。バスは既に門前に横付けされ、庭内には別れを惜しむ在留婦人が集合していた。戸外に出ると婦人達は悲しそうに背を丸めて寄ってきて、何かを話そうとするのだが話にならない。唯握手するのみである。すでに昨夜も話を聞き、依頼のことなどすべて終わっているはずである。しかし今後また幾年を経て会えるやら、また果たして帰国可能になっているものやら前途は闇である。そのことを考えると婦人たちの心情誠に哀れを覚える。

バスの出発に手を振る婦人たちの姿が今でも私の脳裏に写し出される。駅に着き下車かと思えばバスはスルスルと駅のホームに入り、乗車口で止まる。何という特別待遇をしてくれたことか、駅頭の人々の大きな注目を浴びたのであ



る。手荷物はジープ2台が矢張りホームに入り、積み込んである。いまだこのような待遇を経験したことがない。大変な待遇と感謝した。

## 思い出の一つに同行の村上ヨシ子さんのツーピース姿

コンパートメント車に入り、茶を飲みながら外を眺める。いつもの通り大開拓地であり、その農地の広さに羨ましさを覚える。日本では見られぬ駅から駅までの景色である。今回の旅行中に中国の人が言った言葉を思い出す。「日本という国は小さくて人間と自動車がうようよしているんだってな」。彼らから見れば確かにそうである。

さて、我々はチチハル駅に行き、このままハルピンに行くことになる。幕田さんの長男一家と在留婦人多数がホームに来ていた。幕田さんの孫娘は泣き通しである。列車が動き出すと全員ハンカチで顔を押しえた。矢張り悲しい別れであった。

この街の思い出の一つに、同行の村上ヨシ子さんのツーピース姿がある。彼女が写真機を抱え歩道に出て、トロリーバスや満員の自転車の流れを写していると、衆人の目が彼女に注がれ、振り返って眺められている。彼女のきれいな服装に街中の人が見とれたのであろう。街中の人々の服装が黒か紺なのである。商店で見ると美しい模様の布地があるが、まだ統制があるためか若い婦人も飾ることが出来ていない。日本女性に比べてかわいそうに思う。

## 5cm 角位の写真を持って来て「これが私のママだ」

さて、今夜はハルピンのホテルで一夜を過ごすことになる。前にここのホテルで森さんが会った姪（楊さん）かも知れない人に、再度面会する約束である。しかし楊さんが迎えに来てくれたというので、彼女の自宅を訪問することになった。私はその場は失礼したが、後ほど話を聞きうれし涙をながした。楊さんも遠来の客を迎え、ご馳走を準備していたことだろう。宴中彼女は5センチ角位の写真をもて来て「これが私のママだ」と言う。森さんはそれを見て驚いた。自分の姉の18歳当時の写真であったのだ。これで万事解決した。間違いなく姪である。100%の確認をした森さんの嬉しさ、心中万々歳を叫んでいたであろう。姪もまた世界一のおじさんを見つけたと叫んだことだろう。翌朝、広間で手を取り合う2人を見て胸が晴れ晴れとした。

嬉しいハルピンに別れを告げ北京に向かうことになったが、少々時間が余るので松花江まで車を走らせてもらう。ゆうゆうと流れる松花江は40年前の流れと変わらない。松花江の鉄橋も黒い怪物のごとく列車をのみ込んでいく。江上

に浮かぶ遊覧船も 4, 5 隻も客待ちらしい。この松花江も永久にこの流れを持続するだろう。

帰り道、子供鉄道公園に足を伸ばした。12、3 歳の子供・男女 13 名が駅長始め各職場員を集めて私たちに紹介した。駅長たる女の子は日本語が見事であり、私たちを乗せて走ってくれた。車中いろいろ尋ねてみたがその他の日本語は分からないと言う。可愛い子供たちであったので、全員の記念写真を帰国後送り、日本は近いから見物に来るようにと書き添えた。ここで私どもの旅行目的もすべて終了した。これから北京に向かい 1 泊して帰国することになる。